

地域の魅力 ふる里再発見

かきざきはきょう 蠣崎波響と門人たち - 3 -

今回は、波響に学んだ伊達の門人をご紹介します。まず一人目は大橋波練(1767～1855)です。波練の本名は大橋元右衛門といい、霊山の石地区に住んでいました。地域の庄屋をつとめ、また寺子屋を開いて近隣の人たちに学問を教えていました。子弟たちは元右衛門を慕い、大善寺に記念の石灯籠を献灯しており、現在もこの石灯籠を見ることができます。波響の門に入ったのは元右衛門が五十代以降のことと言われています。子孫宅には波練(元右衛門)が八十代で描いた絵が残されており、年齢を重ねてから入門したとは思えないほどの技量を持つていたことがわかります。師の波響から一字をもらい、「波練」という号を用いました。

二人目は熊坂適山(1796～1864)です。名を元といい、市柳(現保原町)に生まれました。波響に絵を教わっていた頃は「波玉」という号を使っており、波響が松前に帰った後、波響の指示により京都の浦上春琴や豊後(大分)の田能村竹田にも学びました。若い頃は「摘山」と号し、のちに「適山」に改めました。1844年には松前藩のお抱え絵師となります。松前(福山)や江戸でつとめ、1855年には再び松前藩領となった梁川で、勘定方として働きました。適山は師の波響に学んだ写生画をはじめ、南画や書も得意とし、多彩な画風を持つていました。三歳下の弟・蘭齋も蘭学者として松前藩に仕えており、兄弟ともに絵が得意だったため、合作の画碑が保原の仙林寺や長谷寺、受円寺、神明宮に建てられています。



右：大橋波練「和合・仙図・寒山・拾得」(個人蔵)
左：熊坂適山・蘭齋「竹園圖」(保原町神明宮)

梁川八幡神社で今年もフクロウの赤ちゃん(幼鳥)が8年連続で確認されました。毎年ゴールデンウィークの前後になると、フクロウが神社境内で子育てをし、幼鳥たちが巣立っていきます。枝の上にはたえずむさむさは、まるでぬいぐるみのように、愛らしい姿が訪れた人々を和ませてくれます。そのつぶらな瞳に心が洗われるようです。そんなフクロウが棲みつくようになったのは、東日本大震災で壊れた社殿の改修工事が行われた2019年から。境内北側のケヤキの木の上から見下ろしていたので、工事関係者からは『現場監督』とも呼ばれていました。その後も、地元の皆さんが、親のような気持ちで大切に守ってきました。カラスが雛を襲うからとみんなで追い払ったり、雛が田んぼに落ちたと連絡が入れば、何をおいても助けに駆けつけたそうです。地元町内会では、フクロウが来たお知らせ



市長コラム 第84回
「福」を招く鳥
『フクロウ』

須田博行

過去の
コラム



せのチラシも回るなど、すっかり地域のアイドルになっています。でも実は私、まだ一度も面会していませんでした。それで、アポなしでしたが、昨日(5月19日)の夕方6時に会いに行きました。梁川で35・1℃と全国一の暑さを記録した日だったので、巣穴の方が涼しいのか面会することができませんでした。もしかすると、無事に巣立って元気に飛んでいったのかもしれませんが。残念でしたが、来年はアポをとってから会いに行こうと思います。みんなに愛され見守られて育ったフクロウ君。来年もこの場所、みんなに福を届けてくれたらうれしいです。